

巻頭写真 鳥浜貝塚の物語はつづく

An unending story of the Torihama shell midden site, Fukui Prefecture, Japan

鳥浜貝塚は福井県西部の三方上中郡若狭町鳥浜字高瀬に所在する縄文時代草創期・早期・前期の低湿地性貝塚遺跡である。西方からのびる椎山丘陵先端部の南側の湖畔に営まれた遺跡であるが、現在は埋没し、南北に流れる鱒川と西方から流れ込む高瀬川との合流地点一帯の地下に位置する。地下水と貝層の影響により有機質遺物の残りが非常に良く、土器や石器のほか、骨角貝牙製品、木製品、繊維製品なども多く出土した。とりわけ注目された木製品が刻歯式の赤色漆塗櫛である。発見当時は最古に迫る漆製品の一つであり、短い9本の櫛歯と、毎年の生え変わりで急速に成長する雄鹿の袋角のような意匠をもつ。

赤色漆塗櫛は、福井県立若狭歴史博物館（旧：福井県立若狭歴史民俗資料館）で保管している遺物カードの記載によると、1975年8月6日、貝を含む有機物層から北白川下層Ⅱ式土器に伴って出土している。長さ8.9 cm、幅7.8 cm、厚み1.0 cmのヤブツバキ製で「漆はもろくフレーク状にはげる」とあり、1978年頃の写真からも分かるように出土当時から赤色漆の塗膜が部分的に剥れていた（写真1）。細胞内に大量の水を含んでいる植物性遺物を展示・保管できる安定した状態にするには保存処理を施す必要がある。漆塗櫛も保存処理のため1977年から専門業者へ預けられていたが、当時の漆製品の保存処理技術では処理が難しく、未処理のまま返却されたという。この頃には漆塗膜の木胎からの遊離が進んでおり、水浸け状態の櫛の公開は1982年の若狭歴史民俗資料館開館時に行われた現状を訴えるための1日だけの展示が最後となった。

2010年、発見から35年を経て鳥浜貝塚の赤色漆塗櫛は展示活用できる状態になった（写真2）。2002年に重要文化財福井県鳥浜貝塚出土品として国の指定を受け、国庫補助事業により2007年度から3カ年計画で保存修理が行われたのである。専門の研究者らを委員とする鳥浜貝塚出土漆製品等保存処理検討会を設置し、修理方針や修理仕様について十分な検討を実施した上で、漆塗膜の分析（四柳，2009）、木胎への漆塗膜の接着方法の実験、PEG含浸および真空凍結乾燥法による木胎の保存処理、剥落した漆塗膜片の膠による本来の位置への貼り戻しと順次作業が進められた。その結果、初めて裏面の様子が明らかになるなど保存修理は無事に完了し、現在は年間の公開日数を限定しているものの若狭歴史博



写真1 鳥浜貝塚出土赤色漆塗櫛の表面、1978年頃撮影。



写真2 鳥浜貝塚出土赤色漆塗櫛の表面、2016年撮影。



写真3 鳥浜貝塚 81L 調査区 3区 W の層序 (南東より)。縄文時代草創期・早期・前期の堆積層で、向かって左下方にある灰白色の薄い層は早期の三方火山灰 (U-Ok) である。鳥浜貝塚の土器型式別時期区分の名称は、縄文時代草創期の SI 期が隆起線文, SII 期が爪形・押圧文, SIII 期が多縄文, 早期の SIV 期が押型文, SV 期が条痕文・表裏縄文他 (早期末の一群), 前期の ZI 期が羽島下層 II・北白川下層 Ia, ZII 期が北白川下層 Ib, ZIII 期が北白川下層 IIa, ZIV 期が北白川下層 IIb, ZV 期が北白川下層 IIc, ZVI 期が北白川下層 III, B~C 期が中期から晩期を表している。

物館で定期的に展示している。最近、分析用に別置保管されていた塗膜片を用いて ^{14}C 年代測定が行われ、櫛の時期が 5310 ± 30 ^{14}C BP (6185 ~ 5995 cal BP) であることがわかった (工藤・四柳, 2015)。保存修理を機に櫛の調査研究面の進展が期待できる。

鳥浜貝塚の現地調査から持ち帰られた資料は漆塗櫛のような人工遺物ばかりではない。鳥浜貝塚の発掘調査では全体テーマを「生業を中心とする生活の復原」と定めており、これに基づく各課題に取り組むため自然遺体を自然遺物として人工遺物と同等な価値のある遺物として取り扱っている。例えば、多くの場合気に留められることのない自然木をある程度取り上げて樹種同定し、縄文時代当時の遺跡周辺の森林植生の変遷を復元している (能城・鈴木, 1990)。試料は同定作業終了後も博物館で保管しており、縄文時代草創期のウルシ材の再同定につながった (鈴木ほか, 2012)。

写真3は鳥浜貝塚の1981年度調査区の堆積層である。向かって右が北で椎山丘陵に至る。前述の調査の全体テーマに基づき、1980年度から1985年度までの6次の発掘調査において食料残渣の定量分析試料用の土壌サンプル、遺跡付近の環境復元のための花粉、プラントオパール、小型種実、昆虫などの各分析用のコラムサンプルが採取された。鳥浜貝塚の堆積物試料の強みは、縄文時代草創期・早期・前期という長いスパンで変化を追えることである。現在これらのサンプルを用いて植物利用の観点から再調査が進められており、鳥浜貝塚の知られざる側面が浮かび上がろうとしている。

30年以上にわたり保管されてきた鳥浜貝塚出土資料は科学技術や研究のシンポを背景に新たな活用の段階を迎えている。

参考・引用文献

- 工藤雄一郎・四柳嘉章, 2015. 石川県三引遺跡および福井県鳥浜貝塚出土の縄文時代漆塗櫛の年代. 植生史研究 23: 55-58.
- 鈴木三男・能城修一・小林和貴・工藤雄一郎・鯉本真友美・網谷克彦, 2012. 鳥浜貝塚から出土したウルシ材の年代. 植生史研究 21: 67-71
- 鳥浜貝塚研究グループ, 編, 1983. 1983年度調査概報, 「鳥浜貝塚 1981年・1982年度調査概報・研究の成果—縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査3—」, 1-63. 福井県教育委員会・福井県立若狭歴史民俗資料館, 福井.
- 能城修一・鈴木三男, 1990. 福井県鳥浜貝塚から出土した自然木の樹種と森林植生の復元. 金沢大学日本海域研究所報告 No. 22: 63-152.
- 四柳嘉章, 2009. 鳥浜貝塚出土の縄文前期漆塗り製品の科学分析. 福井県立若狭歴史民俗資料館館報 (平成20年度), 6-22.
- (鯉本真友美 Mayumi Ajimoto)